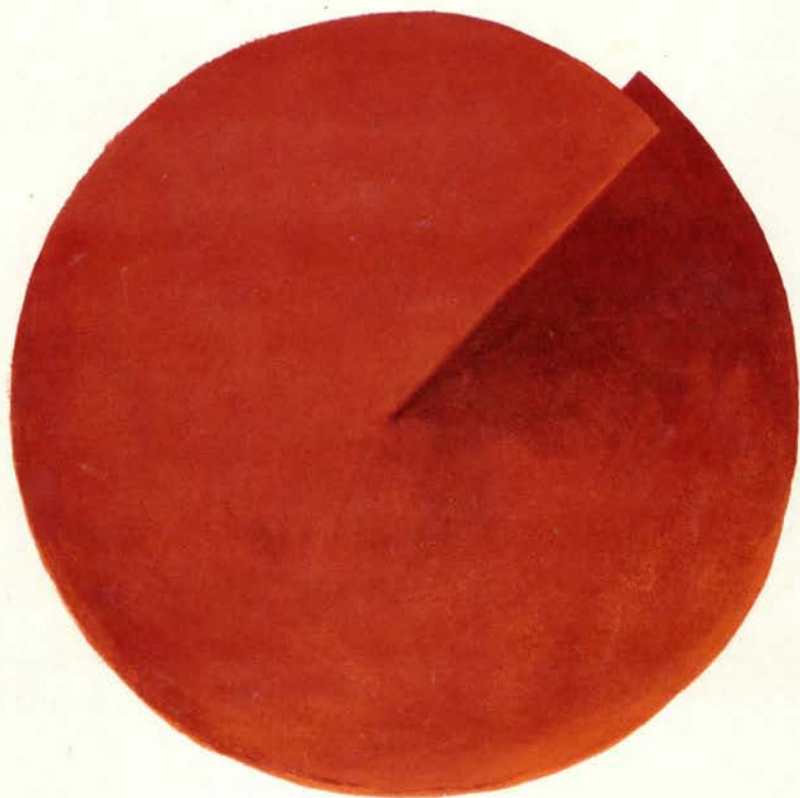


浄土



昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別投承認雑誌）第三二五号
昭和四十九年七月二十五日印刷 昭和四十九年八月一日発行

第四卷

第八号

1974 ^{S. Kuz} 新連載

8

念仏ひじり三国志 寺内大吉

ただ一向に 念仏すべし

大著
和書

ただ一向に念仏すべし

総本山 知恩院副門跡

小林 大 巖

身ひいき貪婪無恥、氣まま勝手のカリガリ根性、無責任の言動の裡に在って、小賢かしそうな理屈をならべる人達から見聞することは、胸焼け気味で、虫酸が走ります。

当時において、智恵第一の誉れが高くおわした法然上人が、「ただ一向に念仏すべし」と、末代かけての御訓諭は、私においては、尊い仰せきけと有難く頂戴臆持です。

みな人が皆、いつでもどこでも、魚くうも食わぬの隔てはなく、男女長幼、職分の別もなく有学無学を通じて、口称の南無阿弥陀仏の一行に、一切の制限束縛なく観念論究の要もなく、ひたむきに阿弥陀仏の本誓を信じて、口に南無阿弥陀仏と申すを、往生の素懐といたす浄土の宗教、人間の宗教、法然上人の浄土開宗の本意と仰ぎ、法然上人の御信念、思想、宗教活動の根柢華実と拝しております。

呼べば直ぐと応答のある、万人が無差別平等に利益頂戴の民主宗教、生々発展の生活宗教は、ただ一向に念仏する浄土宗教と領解です。

法然上人が求められましたは、宗教の学解でなく、われ斯く信じ斯く行うの第一人称の宗教で、真剣体験の宗教だと心得ます。万善の妙体は六字の名号に即し、行者の功德が口称の実行に具うの喝破も、三心だ四修だの語意も、悉くが口称の南無阿弥陀仏にこもり、予が遺跡は念仏の声する処、死罪に処せらるも念仏の事は言わずばおれない等々の大勇猛心は、この体験信念からと存じます。

元気で同信同行は不退でお念仏生活に住すべきでしょう。

八 月 号



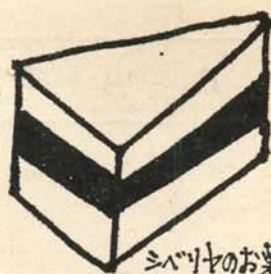
目

次

ただ一向に念仏すべし……………	小 林 大 巖
特集 私のすきな仏像	
	若 林 隆 光…(2)
関東の白鳳仏 金銅釈迦如来像……………	金 田 進 徳…(4)
秘密な憧れ——古えの小さなみ仏たち……………	福 島 純 江…(7)
わが懺悔……………	山 本 禄 瑞…(10)
若い念仏……………	萩 行 健 堂…(14)
法然上人霊場めぐり⑦第11番札所指図堂……………	村 上 博 了…(21)
選択集講話⑦ 以弥陀名号付属舍利弗篇……………	石 上 善 応…(24)
新刊紹介……………	(28)
惠谷隆戒編『法然上人の伝記と思想』	
石井俊瑞著『仏徒・インドに憶う』	
経典に聞くシリーズ⑥ 仏説無量寿経卷上……………	村 瀬 秀 雄…(30)
念仏ひじり三国志④ 法然上人をめぐる人々……………	寺 内 大 吉…(35)
浄土宗の宝物 当麻曼荼羅……………	後 藤 尚 孝…(40)

—表紙 久住 静雄画—

＜カット大正大学美術部＞



特集

私のすきな仏像

若林 隆光

(二松学舎大学講師)

いまはむかし。今昔物語集の作者ならこう書き出したであろう、いまはむかし、私は昨年暮に母を九十歳でなくすまでは、五十余歳でまだ両親が健在だと自慢にしていたのであった。しかし正にいまはむかし、元気がくしゃくしゃとはいっても、父親だけしかないのではそう類稀れというわけにはなりかねて、何となく並の人になってしまったように思われる。

その母は若い頃から浅草の観音さまを信仰していた。弥陀一仏に帰する身がといわれるかも知れないが、その頃の浅草は若い者たちを、というよりは老幼を問わずすべての人々を惹きつけるあるものを持っていたのである。歩いて片道三十分足らずの距離に住んでいる者たちにとって、観音さまへお

参りするという大義名分によって、一月に二度（母は一日と十五日にお参りしていた）づつ天下晴れて外出できるということはどんなに楽しかったことであろうか。しもたや続きの緑の多い路地から路地を辿って、合羽橋辺りで新堀を渡ればもう観音堂は目の前にある。朝食前の軽い空腹感が、快い緊張になって、お堂の前に掌を合せるとき、何か願いがききとどけられそうな気がするものであり、ならんで合掌したり、誦經したりしている同じような朝参りの人々の中に身を置くと、その感じは一層強められてくる。母はこうして、戦争がはじまり、疎開して、やがてその続きに浅草へは歩いて行けない処に落着くことになるまで、月々の参詣を欠かさなかった。

願いの中味は、身体が弱くて学校を休み勝だった私の健康だったこともあり、物価高を騒ぐ今よりはずっと苦しかった家計をもう少し楽にして下さいということでもあっただろうし、子供たちが大きくなってからは良縁を願ったこともしばしばだったであろう。そして願い終えた気安さから、大好だったシベリヤというお菓子の三角のカステラをすみから少しづつ口に入れ、時々まん中にはさまれた餡をつまんでは甘さを調節しながら帰ってくるのだ。朝が早いから幼なかった私は連れていって貰ったことは殆んど無い。この頃見かけなくなったシベリヤの味も母にきいたまでのことであるが、何屋の何でなくちゃとうつつをぬかす名店街の高価な銘菓より、四つかどのミルクホールで売っていたシベリヤの方がどんなに美味しかっただろうか、食べなかった私でも想像が出来る。九州の田舎町から出て来た母にとって洗練された銀座のような街より、何かいつでも鎮守さまのお祭といった浅草は身近なものであったに相違ない。そしてその中心に観音さまがあることはどれほど外出への気おくれ！今のような時代からは想像も出来ないことだがⅡを取除いてくれたことであらう。

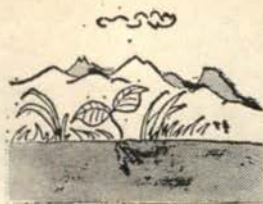
だがその母は決して観音さまのお像を拝んだわけではない。母に限らず観音さまにお参りする人々は、誰も仏像を拝

見したものは無い。一寸八分の網にかかった観音さまのお像があるというだけで、いつもお厨子の帳はしめられていて開かれたことがない秘仏であることはいうまでもない。それなのに母はずっと月参りを欠かさなかったし、お参りに行けなくなった戦後になっても一日と十五日には思い出したように小豆を炊きこんだ赤いご飯をつくったりしていた。願いは叶ったのだろうか。幸い私も丈夫になり、食べるにもあまりこまらず、孫の名と数は覚えきれないどころか、ひ孫まで増えて来たから、もしそう願っていたのなら立派に叶えられたといえるだろう。だが別に叶えられていなくても、いや時には叶えられる筈のない無理なお願いをしたり、今日は何もお願ひすることがありませんなどとぶつぶついながら、掌を合せていた母は、観音さまに惹かれていたのである。母は田舎もので、学問とか芸術とかには終生縁の遠い方であった。書物ばかり読んでいる私にそんなに早く読みなさいなどといったのける母であった。だが植木いじりが好きで、四季花をたやさず、晩年まで庭の畑で取れた野菜を私たちにわけてくれた母は、ものの美しさはわかっていたようである。

「私の好きな仏像」といわれて、中尊寺の一字金輪や、秋篠寺の伎芸天や、薬師寺の三尊や、三月堂の俠侍たちを思い

出すのは容易なことであつた。しかし好き、なというような言
い方が仏像に許されてよいものだらうかと抵抗を感じ始めた
ら、何か安易に仏像に近づき過ぎることが、今のようにもて
はやされてよいのだらうかといよいよ心憂く思われて来た。
たとえ帳が引き上げられても、母は観音さまに懷中電灯を

つきつけるようなことはしなかつたであらう。惹かれていた
のが好きということならば、それでよいし、私も浅草の観音
さまが好きといつてもよい。だが写真をお眼にかけることは
出来ないし、ただ見えない美しさに惹かれているだけであ
る。



関東の白鳳仏

金銅釈迦如来像

金田進徳

(全国浄土宗青年会理事長)

すきな仏像はたくさんある。自分の寺の本尊仏である阿弥陀如来像も非常に素敵な仏さまで、名もないこの仏像を私はあかず拝しているが、やはり有名な仏像の方がよいのではないかと思ひ、深大寺(じんだいじ)の金銅釈迦如来倚像をあげたい。

関東地方に古仏は数少ないけれど、そのうちの一体がこの

お釈迦さまなのである。他には、鎌倉覺園寺の木彫薬師如来像や、千葉県成田に近い安食(あじき)竜角寺の金銅薬師如来像があり、いずれも拝したことがあるが、一番親しみ深かつた仏さまが青年釈迦を偲ばせるこの白鳳金銅仏である。

初めてこの美しい釈迦如来像を拝したのは、かれこれ二十
年も昔の学生時代であつた。

金銅釈迦如来像（深大寺）



当時、武蔵野の雑木林に囲まれた深大寺に行くには、京王線の柴崎という小さな駅から徒歩で行くのが便利であった。便利というよりはむしろ、田舎道を三十分ほどのんびりと歩いてのちに辿り着く気持ちの良さ、これがどうして、たまたまなくよかったせいなのだ。水の落ちる音が木々の間から聞こえてきて、こんもりとした森の深大寺の前に出ると、門前には二、三軒の茶屋があり、石段をのぼってかや葺きの山門を

くぐると右手に鐘楼があり、左手奥には厄除で有名な元三大師堂が建っている。金銅仏の釈迦如来像は正面にある本堂内に安置されているのである。この二十年の間に山門の中を除いては深大寺周辺は大した変貌のしようである。山門のすぐ前の道は広い舗装道路となり、少なかった茶屋は規模も大きくなり、軒数も随分ふえた。ずっと前は一体どの辺を歩いてここへ来たのか見当すらつかぬくらいだ。従って現在ここへは三鷹駅からバスに乗って来るのが一番便利なのである。たしか二度目か三度目に訪ねたときは、境内を出た左の方に広い陸上競技場が出現してびっくりした。そのうちに裏の方にこれまた大規模な神代植物園が完成してこれまた驚いてしまった。大昔からこの武蔵野の深大寺にいらっしゃるお釈迦さまにとっては、このあたりの著しい変わりようにはさぞかしびっくりなさることばかりであろう。

さて、お釈迦さまのお像を拝観させていただくため正面の入口から御本堂に上がる。お釈迦さまは右の奥の方のお厨子の中にすわっていられるのだ。このお釈迦さまは深大寺の御本尊仏ではなく、御本尊には別の阿弥陀三尊像が安置されている。

お厨子の前に坐わるとお坊さまがそおと扉を開き、お灯明をつけ、お経をあげて下さった。それからこの金銅仏のお

釈迦さまについてのお話をして下さった。私のほかにも何人かの拝観者が膝をそろえてじっととききいていた。お厨子の扉があいた瞬間、うすぐらいお厨子の中、金銅仏は黒光りして輝いた。合掌したまま思わずお顔を拝した。素敵な仏さまだ。白鳳時代中期の作と伝えられているお釈迦さまである。

私は、はじめてこの仏さまにお会いした時のことを不思議なほどあざやかに覚えていて。大和路でお会いする仏さまに心を打たれる以上に感激したのだった。同じ関東の竜角寺の金銅仏を拝観する前だったせいもあって、こんなにも素晴らしい仏さまがどうして東國のこんな場所にとまった。右手の二本の指がかけているのがなんとなく気になったが、一度火災に遭っているというから、もしかするとその時の損傷であろうか。しかし全長二尺九寸七分といわれる倚像はほとんど完全な形を保っている。なんとという優しいお顔であろう。唐の影響もうけているようだが非常に日本的なお顔でもある。清楚でそして誠実な若々しい感じをうけた。細く長い切れ目の眼は、広く外を覗いているようで内側を深く照らし親でおられるようだ。口もとには微笑をたたえ、われわれの悲しみや悩みをそっとつんでくださるような、そんなやさしい親しみやすい仏さまである。流れるような衣の美しさ、白鳳仏にみるふくよかなそしてたくましい安定感のある体軀からは、あた

かも若い時代の釈迦に接しているような喜びを感じる。青年釈迦というよりもっと若い少年釈迦のお姿のようでもある。初対面の印象がすぐよくかったからであろうか何度お会いしても心のやすまる思いがするのが深大寺の釈迦如来像である。

釈迦如来像が安置されている深大寺は、浮岳山昌樂院深大寺といい、法相宗の寺として建立され、のちに天台宗になった。法相宗であったことが、この立派な白鳳仏をこのお寺にもたらしただけでなく、仏像の連中や、檀家の人々など何人かを連れて訪れている。たしか最初に訪ねた時だったと思うが、帰りがけに偶然このお寺に随身していた大学の同級生に会ったのだが、真面目な感じのしたこの天台の青年僧の印象も、なんとなくこの深大寺に来ることのやすらぎと深い縁があるようである。いまその青年僧は山形の山寺にいる。

千二百年も昔の釈迦如来像がここに安置されていることが、私にとっての救いでもある。いつまでもここにいらして気軽ににお会いできることを願っている。遠い昔を偲びながら境内をそぞろ歩き、江戸時代からこの地に伝わるという名物深大寺そばを味わうのもまた趣き深いものがある。

私のすきな「銀の匙」の作者、中勘助氏の句である。

鐘つけや古仏まします秋の寺

武蔵野に白鳳の釈迦おはしけり



秘密な憧れ

—古えの小さな仏たち—

福島純江

(童話作家)

どの金銅仏一鉢がきわだっていた。これこそ野中寺の弥勒菩薩であった。天智五年(六六六)丙寅年銘があるという。ローゼットと藤手文の頭飾りをつけ、連珠文にふちどられた裳裾もゆるやかに、半跏の形をとる菩薩像にすっかり魅せられてしまった私たちは、人影のまばらなのを幸いに小一時間も、このお像の周囲をめぐっていたように覚えている。

そのときのM先生の讃嘆ふりは見事であった。一行のうち最年長の先生に気兼ねで、ほかの連中はあまり讃め言葉も口

高松塚古墳が発掘されてからしばらくすると、この国家的文化遺産の発見をよるこんで、各地で各様な催しが行われた。原型大にしつらえた石室や、壁画の模写、出土した副葬品などの展覧がほとんどであったが、二、三の知人のお伴をしたある会場で、私たちは思いがけずもすぐれた仏像を拝したのである。そこには七世紀末から八世紀初頭と推定される高松塚の营造年代とほぼ同時代、つまり飛鳥・白鳳期の仏像が数鉢出品されていたのだ。なかでも両の掌に捧げもてるほ

深大寺へのガイド。国鉄三鷹駅南口から調布行き小田急バスで深大寺入口下車。

にできない有様だった。こういう仏さまが寺内の奥深く秘蔵され、一般の拝観がゆるされないのは残念至極と嘆かれていた先生は、後日、とうとう羽曳野市の野中寺へおもむかれて再度の対面をされたとうかがった。また、ある小冊子に門外漢の気安さからとことわり書きつきで寄稿された一文を読ませていただきました。

……野中寺の弥勒菩薩は女性でしかも老女といえないだらうか。……(略)……。この仏は救済しようとするこの世の方へ身をかがめ、瞑想と待望のうちに年老いたのだ。膨大な世紀を数える人類の歴史から得た知識の重みにのしか

かられ、背をまるめ、そしてまた、この歴史の犯した誤りと罪の重みが、このみ仏をこの世へと引き入れる。……(略)

ところがである。先生が野中寺の弥勒菩薩に熱中されるにつれて、このみ仏は私から遠のいていかれるような気がしてきた。あの会場での印象とはうらはらに、重たげな冠りものをつけ、首をかしげて今日も渋面をつくっておいでのようにさえ思えてくる。はては弥勒さまを一人占めしているみたいな先生まで、少々憎つたらしくなる始末で、いささかやりきれない。

法隆寺四十八体仏のうち代表的な観音菩薩像



そんなある日、M先生から、是非引き合わせたいお方があるから、万障繰り合わせて出向くようにとのお言伝てが届いた。なにごとかとげげんに思いつつ、指定の東京国立博物館へでかけた。お待ちかねの先生は本館の方は見むきもせず、さっさと歩きだした。旧御物の法隆寺四十八体仏が保存されている宝物館が目当てであったのだ。なるほど……先生は、かの弥勒さまのとりことなつて以来、古代の金銅仏に魅せられたなとうな

特集 私のすきな仏像

ずける。この法隆寺宝物館は開館日に制約があるため、私は初の参観であったが、先生は勝手知った邸内のように、あるお像にむかってつつと進まれた。いきおい、先生につられるように私もそのお像の前にたつ。みると、邪気のないお顔立ちの小観音像であった。御身の丈はせいぜい三〇センチ、右のお手に宝珠をお持ちになる。親指と中指で挟むようにお持ちの宝珠は小粒で、真珠のようだ。ご器量はよろしくない。まる顔で眉は高いが、腫れ臉の下がり目、それにすづまりの鼻、お口も大きい。が不思議にも、そこはかとな親近感が、何故か湧きあがってくるのだ。しばらくお顔をみつめていたうちに、はたと思ひあたった。自分の幼い頃の面影をこのお顔に見いだしたからである。傍らでは先生がただにこにこしておられる。私の幼な顔をご存知だから、このことを余程楽しみにしていらしにちがいない。先生のいう、引き合わせたいお方とはこの観音さまであったのだ。

法隆寺四十八躰仏は、それまでのいわゆる三国伝来の様式

から脱して、純粋な日本仏として生まれでた最初の仏像だそう。遠く飛鳥の世に大和に棲まいしていた民族が、おのが宗教と美の意識を信心深い芸術家の手に托して形としてとどめおいたのが、このみ仏たちであらうか。

ただ、法隆寺宝物台帳のナンバーだけでよばれておいでの腫れ臉のこの観音さまには、気構えた風が微塵もなく、こちらにもまったき童心にたち戻って、何もかもお話し申しあげられそうである。それも、大人には打ち明けれない子ども心の秘密な憧れが、現実となってあらわれた悦びに似た感情をもつて――。

帰りみち、先生は夏のブランを細々と話してくださいました。大和の寺々を巡り、最後に野中寺へ詣でるコースである。屈託なげな先生ではあるが、若しかすると、来世への希いを胸底に秘めて、かの野中寺の弥勒さまに憧れておいでなのかもしれない。こんな思いがふと心を横切った。



わが懺悔

山本 禄瑞

(千葉県木更津市蓮沢寺住職)

懺悔文

「われ昔よりつくる所のもろもろの悪業は、皆無始の貧瞋痴による、身と語と意より生ずる所なり、一切をわれ今みな懺悔したてまつる」

とは朝夕お勤めの時香偈、三宝礼、四奉請の次に我昔所造諸悪業の文で唱えているところである。

小僧時代から六十余歳の今日まで、毎日のように仏前に誓いながら、真に三毒煩惱の懺悔ができていたろうかを省みて、全くお恥

かしい思いにさいなまれる。

刑務所

私は千葉刑務所教誨師を拝命して早くも二十余年。毎月数回施設を訪れ、多数の対象者と読経したり、念仏を唱えてそれぞれの縁故者や、あやまって殺めてしまった亡霊の供養をするのが通例である。

不思議なことに教誨に出て、ご供養をして頂くと危険な工場労作にも事故をまぬがれると言つて、こうした信仰のもとに集つて来る。私のような者が拝読するお経にどんなこ

利益がある筈はないが、皆んなの気持が大集となつて教誨堂に満つる説経、念仏の合唱がそれぞれの心の中に淨信の聖光を放っているものと思われる。ある対象者から、

つらきこと多き一日今日もおえ

疲れをほぐす念仏の声

という一首を送つて下れた。

——歌人 島 秋 人——

皆様もご存知のことと思うが、昭和四十二年十一月二日に東京拘置所で露と消えた歌人島秋人。本名千葉覚君は真に懺悔滅罪の権化の人と思う。

彼はかりそめの心の煩悩にうちまかされ、してはならない殺人、強盗の大罪を犯してしまった。こうなるまでには色々な訳も、事情もあったらう。しかしその残忍な仕打ちは許されず、遂に死刑の宣告となつた。何んとか生命だけはと世論も働いたが及ばない。判決の下された日、

わが死にて つぐないうるや被害者の

み霊に詫びぬ 確定の日

と美しく懺悔の心でこの宣告を受けている。到底今の私にこの心境を納受できるだらうか省みて、まことに慚愧のいたりである。

爾来彼は短歌に精根をうちこむとともに、教誨によつて宗教信仰の培養にひたむきな努力をかたむけた。処刑の日被害者へ宛てた道墨に、

鈴木様

長い間お詫びも申し上げず過してしました。申しわけありません。

本日処刑を受けることになり、ここに深く罪をお詫びいたします。

最後まで犯した罪を悔いて居りました。

亡き奥様にご報告して下さい。私は詫びても詫び足りず、ひたすら悔を深めるのみでございます。死によっていくらかでもお心の癒されますことをお願い申し上げます。申し訳けないことであります。ここに記しお詫びの事に代えます。

皆様のご幸福をお祈り申し上げます。

昭和四十二年十一月二日

千葉 覚—道愛集—

と己が罪を懺悔し、従容として刑場の露と消えた。しかもその前夜彼は澄み切った心を

この澄める心ありとは知らず来て

刑死のあすに迫る夜 温し

と歌い、神仏の恩寵を頂き、己が罪の懺悔の極地をきわめた時の心境がにじみ出ている。

「特に刑死の明日に迫る夜温し」と歌った彼の心境には仏菩薩に抱かれる信仰心に徹している。処刑直前、彼は最後の遺墨として、

笑む今の素直になりしこのいのち

在るとは識らず生かされている
まさに高僧の入定大往生にも似た厳然たるもので、衿を正して合掌せずにはいられない。
三十三歳の短かった生命ではあったが、罪の深さを認識し心から懺悔する所、滅罪の実があがるであらう。

——先師の遺訓——

よく私は師匠から次のようなことを教えら

れた。

「至心至誠に徹した心をもって、本尊前に合掌礼拝し、罪業甚深のありのままの姿をつつみ隠さず自首告白する。これを対首懺悔と云う。対首とは共に自由、自首の意である。

こうした懺悔をくりかえしするところに現われる功德力は実に偉大なものであり、その利益によってどんな恐ろしい罪過も消え去り、純淨無垢な聖感に充たされることができるものである」

と諭されたことは今も心に残っている。自己の罪深きを覚り醒める時、仏菩薩におすがりするというが礼仰というか、こうした謙虚な心持ちが生れ、島秋人氏ではないが「笑む今の素直になりしこのいのち、在るとは識らず生かされている」心境が開かれてくる気持ちになる。

——ネパールの生き神さま——

私は昨年十二月幸いにもインド日本寺落慶

慶讃浄土宗参拝団の一員に加えて頂き、約三週間、聖地巡拝の光栄を得た。その時の感激は筆舌につくし難いものがあった。特にネバールのカトマンズについた時、ふと数年前新聞紙に報道されたネパール在住の日本人医師のことが心に浮んだ。参拝団長藤井実応師と同道の医師佐藤鐘二先生も思いは同じであった。早速、案内人ランデット君に相談したところ、岩村先生はネバールの生き神さまだ。ご都合をうかがって案内しますとのこと。幸い在宅されたので藤井、佐藤両先生のお伴をして急ぎ訪問の車の人となった。二十分ほどでカトマンズ郊外の岩村氏の宅についた。約十畳間程度の診察室、応接間、事務室を兼ねた二階の一室が先生ご夫妻の住居であった。先生は日本キリスト教海外医療協力会の派遣医（鳥取大学医学部助教授、医博）として一九六六年（昭和四十一年）にこの地にまいられた。以来今日までコレラ、チフス、ライ、天然痘、結核等々ネパール国民を蝕む病敵と戦っておられるのだ。生活内容の

実に質素なものにも敬服した。色々有意義なお話もうかがうことができた。お部屋の壁には大きなネパール国の地図に原地語で病気発生の状況が克明に記されており、またあらゆる統計グラフを始め所せましと英語、独語の表示文がはられてあった。ところがその中央に墨痕あざやかに日本文字で、

「神の民として常に懺悔しつつ、現地の文化を理解し、謙遜に喜んで住民から学ぶこと」と記され、一きわ目を引いた。ネバールの地はヒンズウ教が国教で他宗教の伝道を禁止しているとのことだが、そうした困難な条件の中でもめげることなく医療技術を通じて異民族のため人類救済のため全霊を投入されている姿に接し、その崇高なお心に打たれた。

この一文にあるように、神の民として常に懺悔しつつ日々の医療活動が続けておられることを思い、我々仏教者にとってこのご信念を大きな亀鑑として、自から更に切磋せねばならぬとつくづく反省し、自己の不敏を深く懺悔せずにはおられない。

序



若い念仏

萩行健堂

(富山県高岡市極楽寺住職)

これは素晴らしい。若者が自然に、お念仏に集ったら、それは若い念仏と言えるだろう。若者は常は魅力あるものに引かれる。嘗て日蓮聖人が「日本国中の者、みな法然房が弟子と見えたり」と評したこの念仏に、現代の若者を魅了し惹付ける力があるであらうか。そうして若し若者が「ナゼ念仏を申すの」かと質問したら私は即座に「念仏は適者生存を教えるから」と答えるだろう。これは含蓄の深い魅力ある言葉だ。私は、これ信じる。そうして青年達に語りたい。一体、念仏を何と思うかと。

法然さまは、念仏とは、その人の生活を指導するものである、口で唱える念仏には阿弥陀さまの内証外用の万徳が、みな籠ると申された。浄土の善知識達は、念仏とは南無と合掌する人と、その合掌を受けて下さる仏さまとが一体になった六字名号を唱えることであると教えられる。私は万徳のこもり、そうして人と法にて組織された名号の中に、若者を魅惑する何ものがあるか探してみたい。

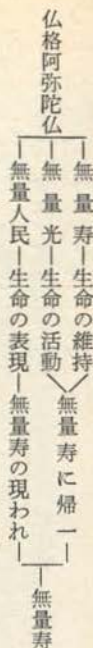
(一) 仏格(阿弥陀仏)——法

イ 阿弥陀仏の核

浄土宗所定の三部経に仏格として梵名阿弥陀仏を漢名、無量寿仏、無量光仏と訳し、その内容を寿命、光明、人民の三

無量（梵本光壽二無量）で説き、和語では岸門主は、無量寿は永遠の生命、無量光は無限の活動と示され、石井教道博士は、無量の寿命と無限の光明と説かれた。本願文では第十二光明無量願第十三寿命無量願第十五眷屬長寿願の三願に相当します。法然さまは、阿弥陀仏の一切の功德中、寿命をもつて本となすと示されました。即ち永遠の生命が諸の功德の基であり、三無量の基礎である事を説かれました。

整理して図示しますと、



要約しますと、阿弥陀仏の功德の本は、無量寿即ち永遠の生命にて、これがアミダ仏の体であり核でもあります。このような無始無終の法の性を法身といえます。宇宙の本体万有の本源を仏格論的に、かく名付けたものです。今の常識科学では宇宙大生命体といえます。

□ 宇宙大生命体

今日の常識科学では、宇宙とは、(一)力即ちエネルギーの一元たる大生命体である、(二)万有引力の行われるところ、(三)不変の運行のあるところ等と説かれます。約言すれば自然科学の究明せるエネルギー恒存、物質不滅の法則の説かれ、また

生物の進化論に於ける自然淘汰、適者生存、新陳代謝の法が行われるところです。

ハ 仏格と宇宙生命

常識科学とは自然科学の粹の普遍化し、現代若者の日常生活の常識となったものを指します。青年は大自然、大宇宙を一大生命体と見ています。

この自然科学に使用する文字を上述の仏教術語に配しますと、宇宙大生命体、即ち無始無終の永遠の生命、即ち法性であり法身である。即ち無量寿である。即ち無量寿仏である。要約しますと、無量寿と宇宙大生命体とは、異名同体となります。

二 徳目の研究

宗教観より宇宙大生命体、即ち無量寿仏の徳目を挙げますと、

◎ 伝承の徳目

阿弥陀仏——内証功德——四智、三身、十力、四無畏等
外用功德——相好、光明、説法、利生等

◎ 新開顯の徳目

無量寿仏と宇宙大生命体とは異名同体ですから、宇宙大生命体を研究した自然科学の成果は、これみな無量寿仏の未顯の徳目に相当します。この未公開の徳目を開顯し、生々しい

新鮮な徳目で、阿弥陀仏が語られるとき、のびゆく若者の心魂を揺すぶり耳を傾けしめ、関心を呼び起こすでしょう。宗教心は、みんなあるんです。

精説しますと、弥陀は無量寿運動そのものであります。元来仏教自体が運動法の教旨にて、その根本義三法印の無常無我説、または仏教の完成せりと評される業力説輪廻説等智観乃至情意観をもって見れば、みな運動せる法の一面を説くものです。浄土教では無量寿運動は無限運動に拡大され、その運動は止まることがありません。教説では光明遍照となり、無上道となり、四弘誓願となり、諸仏来迎、または往還二回向の繰り返えさるる生活となります。また無量寿運動はエネルギーなる大生命体の運動ですから現象界に現われて、そこに造化の妙が見られます。

造化の妙——実なるもの——創造顯現相
——虚なるもの——分解隱没相

即ち造化の妙は、エネルギー恒存、物質不滅の法則のもと変化を繰り返します。一例すれば非情に成住壞変の四相あり、有情に生滅、生老病死あり、生物進化の法則は自然淘汰、適者生存、新陳代謝の法として自然に行われます。みな無量寿の運動であります。(附記 この無量寿運動を現代の若者の感覚に適うように表現または表象されたものは、まだ

ありません。情意の芸術的表現は未完であります。現存の浄土芸術は懐古的なものになっています)

(二) 人格(南無)——人

イ 南無の核

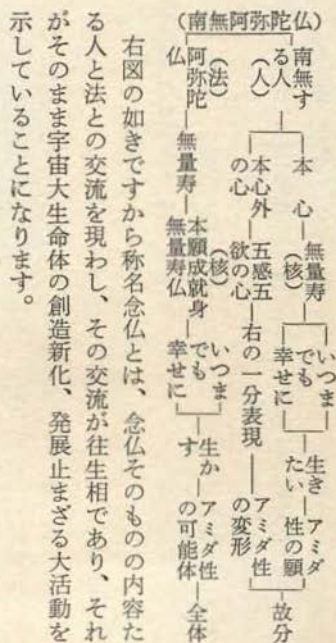
南無と婦命合掌する人の心に、(一)拝む心と(二)拝まぬ心、との二つがあります。私達は毎日忙がしい生活の中で複雑な希望、欲望を抱いて日を過ごしています。ナゼそのような複雑な希望、欲望をもつかと調べますと、それは人々に生れつき二つの基本的な欲求があるからです。それは、人は本能として「長生きしたい」、その長生きも「幸せな(光ある)活動でありたい」という二つの欲求です。これをつづめますと「いつまでも幸せな(光ある)長生き」ということになります。この心が人に毎日の希望欲求を駆立てる根本となる心であります。人に拝む気の有る無しに関係なく、人の心の核となっています。換言しますと人の心は、この核心を中心に、この希望を実現するため、毎日複雑な欲望をもって忙がしく働くということになります。ですから核心は私にとって一番大切な心となります。この大切な核心を本願文に照較しますと、第十二光明第十三壽命第十五眷属の三無量願に相当します。三無量は無量寿に帰一しますから、私の核とは無量寿と

いうことになります。

それで私の核心を取り巻く働き手である希望心、欲望心は、理想実現の変化に伴ないドンドン移り変わる相対的なものですが、理想実現の核心は条件に左右されず、何時も心の奥深く温存され寝ても覚めても、乃至無意識中でも活動しています。この核心を本心、真実心、仏性、無量寿、アミダ性と名付けます。自己発展の源動力となるものです。

(三) 仏格と人格の調和統一

名号の南無阿弥陀仏とは、帰命合掌する人と、その合掌を受けて下される阿弥陀仏とが一体となり、六字名号として姿を示されたものです。そうして不思議な事に人には生具としてアミダ性、即ち無量寿が具っています。人の核心であります。また阿弥陀仏の核も無量寿ですから、人と法の核は共通した無量寿、即ちアミダ性で調和され、統一されていることになります。要約しますと名号とは、人と法の調和統一を示し、宗義では不離仏（親縁）値遇仏（近縁）と説きます。然も私の核心無量寿の願を満足せしめ給う仏は、十方諸仏中阿弥陀一仏が本願成就身として立って下されています。即ち無量寿仏は完成者として、未官の私を同化して下される事になります。図示しますと、



結論

私は名号の中に二つの無量寿なる核を見出し出した。

「人格の核(小)——無量寿——アミダの性——願望——したい(願)」
「仏格の核(大)——無量寿——アミダの性——成就——させる(行)」
同質

右図の如く人格、仏格には共にアミダ性があり、不完全なる人核が完全なる仏核の体に帰入すべく運動(往生)をする。これが念仏是一と規定された念仏往生法であります。

◎念仏は無量寿運動そのものでありますから価値は高いのです。これを生物界に見ますれば生物進化の法則は、自然淘汰、適者生存、新陳代謝と表現されます法爾自然法であります。

す。念仏者に長寿のお方の多い事は、念仏者は無量寿運動なる自然法に順じていられるから、自然法の功德、適者生存法力が行者に加被していると見られます。

また例してみますと、仏は自然悟道の密意として、念仏無量寿運動の徳目の一つに適者生存法を説き給うと解信すれば、繰り返さるる称名は行者の心奥深く納入され、自己反省となり、精神的には精進を、肉体的には健康を、社会的には信用、自己拡張等々生活内容を充実せしむる念仏に直結します（性善説）。そうして、それが善い事と知りながらも、容易に実行されぬ自分の業障の深さを知り（性悪説）、しかもアミダ性によるが故に、更にその上にも自己発展せんとする努力、向上、進歩（無上道）を内容とした念仏に変成されます。また物質不滅の法則は、因果律、業道不滅、自業自得法に関連し、念仏者に三業の用心を与えます。

◎ 念仏は無量寿運動即ち無限運動を繰り返しますから、そこには虚実の二面ができます。

— 実なるもの — 光を見詰めて前進す（性善説を本とす）

— 虚なるもの — 衰れを見詰めて内向す（性悪説を本とす）

現代の教化は情緒を説くべきには非ずして、老醜脱皮前進を説くべきではなからうか。若者は適者生存を教える念仏により、物心両面の無量の宝を掴み出すべきではなからうか。

創造、新化、自己発展、それは若者の特権だ。そうして、それを指導するものが無量寿運動即ち念仏だ。

Ⅰ 念仏道の虚なるもの（分解隠没相）

弥陀本願文の「十方衆生」とは、仏の大衆への呼びかけであります。貴賤貧富賢愚善惡の差別はありません。ただ中国の二大思想、孟子の性善説、荀子の性悪説中、道綽禪師は性悪説を以て、十方衆生を解し、「一生造惡の凡夫」と規定されしより、淨土教は独自の宗教文化を築きました。人間性の善惡を論ずるは、共に性の一面を強調するものにて性善説を表説となし、これを批判して説かるる性悪説を裏説とします。両説を基礎に築かれし文化には、各明暗陰陽等対象的な特色文化をもちます。

この性悪説を継承する人達は、人間性を「罪惡生死の凡夫」「十惡五逆の衆生」「愚痴の人」「六道輪廻の衆生」等の表現を用います。ここで注意すべきは、教旨とその影響を考えてみる必要があります。

性悪説の立場の人で、

1 性善説を批判して説かれた性悪説と知って、性悪説を説く人

2 裏説である性悪説を表説と思いこんで性悪説を説く人
3 裏説と知りながら表説とし法の盲点を利用し、この隠裏

に逃避韜晦する二重信仰の人

右説の①価値高き立場であり②は伝統的家庭宗教の弊の見らるるところ③は教家自堕落の起因と考えられる。浄土教も虚なる角度より見れば、遁世的哀愁内向性調の教旨となり、無量寿運動の發展性に背く事になります。しかも大切な事は、性惡説は批判の果実にして、性善説を充実せしむる立場①より説かれますれば、その教団は立派に成長しますが、性惡説に止まるときは、その宗教文化は没落すると見られます。

更に性惡説また真なりと言っても、これには法として内蔵せる欠点限界があります。この学説を本に幼児、兒童、少年少女（青年）を指導し教化することは、殆ど不可能です。この年齢層には自己批判の目がありません、また教化の基準も、現代は各自の天分を発揮させる事が要点となっていますから、性惡説で教化する時は、その天分を歪めて仕舞う結果になります。この場合は性善説の果実を模倣して教化するより仕方ありません。形式的な弱い教化になります。

口 念仏道の実なるもの（創造顕現相）

性善説、性惡説成立の後を見ますと、最初に性善説が説かれ、これを批判して立つものが性惡説であります。性善説は平凡に見えますが無礙の大道、公道にて社会の安定思想であります。觀經所説、世戒行三福中、父母に孝養、師長に奉

持、慈心にして殺さず、十善業を修す、深く因果を信ず、また無量寿經には五大善を説き、また光明無量願成就文に「この光に遇はむものは三垢消滅し身意柔軟に歡喜踊躍して善心生ぜむ」等は性善説より出発せる勸善懲惡の教旨にて力強く説き得る安定思想であります。また幼児教育の言葉に、幼児教育——よい子、おりこうちゃん、よい子だネンネしな、元氣な子、よい子は泣かないで、お手てつないで、日まわりのように

少年教育——一寸の光陰輕んずべからず

不倒不倒達磨のように

努力努力垂柳の蛙のように

青年に——大志を抱け、天を相手にせよ、艱難汝を玉にす、青空を見よ、夕焼を見よ

徳目は沢山にあります。これはみな無量寿より演繹されます。換言すれば南無阿彌陀仏より開顯される徳目にて、いさみある、おらかな念仏のうちに実践されます創造、進化、建設調の教えになります。

これ等は無量寿運動の性善説より説かるものにして、序文に引例せしが如く「ナゼ念仏申すか」の問に対し「適者生存を教えるが故に念仏申す」と力強く簡潔に返答し得るものであります。

「適者生存」それは完全なる自己発展の姿であり、若者の理想であり、且また無量寿運動そのものを表しています。往生の三義即ち「生れかわる」「生^{なま}ち往く」「往て生る」も当然に適者生存を別説した事になります。

ですから「南無阿弥陀仏 適者生存之業念仏為先」と説く事が出来ます。(付記 性惡説に基づく教化の面に於き、如何なる時点に於き、性善説を組入れる可きか、教家への課題

△みほとけと二人▽

次のような法華經に説かれている言葉を味わいたいと思います。

この処は即ちこれ道場なり、諸仏もここにおいて無上菩提を得たり。ここにおいて法輪を転じ、ここにおいて涅槃したもう。

この処、ここにおいてというのは、この私たちが生活している現実の娑婆(しゃば)世界をいうのです。苦楽あいなかばし、お互い人間同志がいたわることもあるが、傷つけ憎むことも多い、この人間の世界、生きている現実生活をいうのです。この現実の生活こそ、働いている職場こそ、私たち

となりましょう。

結 び

私は念仏道の脱皮として「若い念仏」を書きました。未頭の弥陀如来の徳目を現代の常識科学にて開顯し、世代を生きぬく若者に語り、その共感を得たく、所信を述べてみました。

に与えられた唯一の修養の道場なのであります。

特別に別世界で行なったり、人里離れたところに道場があるのではなく、この生活している娑婆世界において、み仏は悟りを開かれ、宇宙の真理を説き伝えられ、永遠のねはんの悟りの境界に入られました。み仏の教えに導かれて日々働くとき、必ず、そこに人生の生きる意義と価値が見出され、生きがいを感じられるのであります。

「この三界は、みなこれわが(仏)所有なり、その中の衆生は悉くこれわが子なり」とも説かれ、み仏とともに生きる生活こそ、不安に悩む現代の私たちに、豊かな光を与えてくれます。

み仏といつも二人のよいくらし

法然上人靈場めぐり

第七回

村上博了

第十一番札所

奈良 東大寺

指図堂

第十一番札所指図堂は現在の奈良市雑司町にある。東大寺大仏殿西の方約百米位の所で南面して建ち、東大寺勸進庵松院前に位置する。本尊仏は、大變親しみ深い法然上人立像である。

東大寺は若草山の麓にあり、奈良七大寺の随一、聖武天皇の御願寺、日本国分寺の総元締大仏殿大仏さまで知らぬ人がない程有名であった。治承四年（一一八〇）十二月二十八日、勢にのった平重衡兵団は、東大寺興福寺に逃げこむ僧兵を追撃放火し、遂に大仏殿諸共焼亡してしまった。恐ろしい戦乱

を避けて、山野に隠れひそんでいた庶民は悪夢のような一夜あけると、風なまぐさい新戦場の悲惨さ、信仰靈場大仏殿等諸堂は影もない一片の灰燼と化し、大仏さまの頭首も見当らない無常さを仰いでは、神も仏もない、いよいよ末世なる哉と、なげき悲んだのである。

信仰のメッカの死屍横たわる風なまぐさい荒涼たる新戦場の地獄相を聞かれた法皇様は、一日も早く復興したいと心を千々に砕かれた。そうして、翌養和元年閏二月四日、狂暴清盛の逝去により庶民の願をお汲みとりすみやかに再建せんと企画され、四月右大弁藤原行隆を南都に送った。行隆卿は上人の高弟信空の父である。四月八日花まつりに勅使として焼跡を檢視し「東大寺の焼跡を見て末世哉と目もくらむ心持、悲しみに耐えない、勸進につとめ早く再建したい」と法皇様に報告した。

行隆復命の一節に

往時から、かの寺院は、一天四海の人々が協力勸進により建立されています、先づ大勸進聖を定められたい



大仏殿の建立について俊乗坊が上人の推挙で建築の指図をした処

〈知恩院所蔵〉

と再建意見をのべている。法皇さまは

まことに然りよろしく先例に委せられよ、器量の仁をあげ玉へ

と御言ばを賜わり、識見人物、当代第一人者で、諸人から厚い信らいのある聖人は誰かと広く日本国内を調査された。そうして日本第一の聖として、法然上人に勅宣があったのである。六月末のことであった。ついで六月二十六日には、行隆が造東大寺長官、中原基康三善為信ら同寺官に任ぜられたのである。

上人は固辞し門徒の中から最適任者として俊乗房重源を推せん、八月大勸進職に任ぜられた。勿論上人は陰に陽に全門徒を挙げて重源を扶け大仏殿再建に協力し、又大殿作事を指図されることになったのである。

二

御詠歌は

さへられぬ 光りもあるを おしなべて

へだて顔なる あさがすみかな

という。さへられぬ光りとは如来の光明である。お念仏の声する所、如来ましまして衆生済度の光明を放ち玉うて、なものもさいぎることが出来ない。棚引く朝霞は、それとは知らず「へだて顔」である。光明に応ずる仏性は人生の宝であ

り、悟りへのよきキップである。

併しこのお歌は、大勧進重源上人への花向けであり、労苦に耐えて大目的貫徹をはげまし、さまたげあったとしても、必ず成就成功することを物語る。

三

彼は六幡勸進方途につき、上人に相談したらしい。一輪車を六幡造り、七道各地（全日本）をくまなく勸進することとした。

六幡の六は六字の名号南無阿弥陀仏に擬している。一輪車は経済的点もあろうが、一向（ひたすら）又はよろず一心を示し、一輪であれば、人々の支援が無い時は倒れる。大仏殿再建は一輪車のようなものである。十方有徳者の暖かい協力を支援なしには成功できないことを、此事実で説示した。

その心は、お念仏の合掌のように扶け合い始めて大願成就する事を弘く訴えたのである。

彼はかねての大願とは云い、師表法然上人の推挙を得たからには、その大願をなしとげて厚志に報いなければならぬ。仮令一紙半銭一束の寄進といひ、信仰心の開拓であり仏心の協力でなければならぬ。従って誰でもいつでも何処でも容易に出来る南無阿弥陀仏を合言葉とし、念仏する所、如來まします何時も護持されて有難いと勸進した。

四

十カ年の歳月は流れた、建久元年二月一日である。日本晴の暖かい良い日であった。大仏殿はすでに半分程出来上っている。大仏殿南の軒下は、極楽のすがたである。

親経さんだら 浄土五祖像

二幅をかけて、法然上人の浄土三部経の講説が、法皇の宸命で行われた。この日は阿弥陀経の説法である。

群集の前席には、おのおの肌に腹巻、手に長柄の大なぎなた等の武器を持った荒法師武者二百人ほど陣取り、一言たりともひ謬の言葉がとび出したなら、目にも見せんと肩を張り目を怒らしていた。

上人はいつものおだやかな調子で、当時の奈良の仏教三論法相から諸宗を判釈、ついで浄土宗の専修念仏義を宣揚、南都に於ける「浄土宗宣言」を行ったのである。

大仏殿作事は、宋国文化に精通した法然上人の助言と指図により進捗していった。

上人は指図堂にあつて、大工職その他の工人達を懇篤に指図されたのである。そうして大仏殿は美事に完成建久六年三月十二日、頼朝臨駕、盛大な落慶大法要が行われた。指図堂の反対東側に念仏堂がある。

選 擇 集 講 話

第十六章段

以弥陀名号付属舍利仏篇

弥陀の名号は永遠に伝えられる

石 上 善 応

(大正大学教授)



一 念仏の永遠性

「人間の能力も時期もけがれを増していく乱れた時代には、疑惑や非難も多く、したがって出家者も在家者ともに嫌って、聞こうともしない。修行する者がいるのを見ては、瞋りをみなぎらせ、いろいろの方法で邪魔をしようとし、うらみの気持をきそっておこし合う」ものだと言導大師は語られる。人間とはそういうものである。しかし、なぜに「釈尊が説法していてまさに終わろうとしたとき、ねんごろに阿弥陀仏のみ名を後世に伝持するようにいわれた」のであろうか。このような闘争や

憎しみあう人間をこそ救いとうとしたのが阿弥陀の本願であったからにほかならない。救いようのない人間がじつは念仏という単純な行為によって救われることを善導大師は熟知しておられたのである。「すべての人びとは、心をついにし、あらゆる仏法を破るような大罪におちいる理由を知って、懺悔すべきである」と述べられたのもそのことである。先入観を捨て、虚心に念仏を唱えよというのは、善導大師自身の体験を通して語る感懐でもあった。念仏は永遠の理法である。舍利弗に托したのも、いかなる末世の時代でも、念仏のみが唯一の道として、罪惡にまみれ、怨憎のるつぽに落ちこんでいるものに對し、一筋の光明として手を差しのべるものであつ

たこと説き示している。善導大師の言葉を法然上人はそのまま受け継がれた。その信念は最後の章で高らかにかけられた。まさしく、この章は念仏の永遠性を、永遠の生命に生かされている姿を浮彫りされようとしたものである。

釈尊が阿弥陀のみ名を、ねんごろに舍利弗らに伝えられたということは、迷える人びとに、このすばらしい念仏の行が永久に続き、いかなる乱世になっても、この教えのみの真実と永遠性を保つよう指示したことにほかならない。この保証に支えられて、ともすれば退きがちな凡夫に励まし力を与える助けとなることは当然であろう。仏の保証ほど無言の支えはない。

二 仏のえらび

その保証もよくよく考えてみれば、仏自身が念仏の行のみを選びとられたことに基因していた。法然上人は「そもそも浄土の三部経の趣旨を考えてみるのに、多くの道を求める行のなかで、念仏を選択して、帰着すべき本旨としている」と考えられた。「念仏は法蔵比丘がかつて二百十億の仏国土のなかから選択された、浄土に往

生するただ一つの行である」から選択本願（せんぢやくほんがん）と呼んだのである。選択にも浄土經典に説かれていたものを総合すると八種あると法然上人は分析する。そのなかの四種は阿弥陀が選択されたものであり、三種は釈尊が選択されたものであり、残りの一種は六方に遍在するガンジス河の砂の数に等しい無数の仏が選択されたものであると説き、さらに、「阿弥陀・釈尊、および十方に遍在しそれぞれガンジス河の砂の数に等しい無数の仏たちは、心一つにして、念仏する行為一つのみを選択されたもの」である断言される。決して、善導大師でもなければ、法然上人の選択でもなかったのである。人間のがわから勝手に選びとろうとしたのではない。仏のがわから迷い悩める人間のために、ただ一つ選びとったのが念仏であった。仏の本願であるから、迷うことなく浄土に往生するように勧めている。人間の選びは、正しい判断がともなうとは限らない。仏が人間のために慈悲の精神をもって選びとった念仏に、どうして疑いをさしはさむ必要があろう。

三 出合いの喜び

これを発見した法然上人はさぞかし嬉しかったに違いない。その道を教えてくれた善導大師との出会いは、まだどんなに楽しかったことか想像にあまりあるものがある。善導大師に会うといっても著作を通してではあるが、仏の保証に支えられ、善導大師の教えに導かれた法然上人の喜びは、このただ一つの道を進んでいけばよかった。この教えを示してくれた一師の出会いを大切にすればよかったのである。その一師である善導大師は仏の境地をまのあたり感得した（三昧発得）人でもあった。それだけに教えは真実であると受けとることができたのである。偏依善導（へんねざんどう）と法然上人がいわれるのも、単なる出会いではなかったからである。人間はたがい道で出会い去って行くけれども、心の交流は少しもない。しかし、機縁は熟さなければ心のふれあいも生まれえない。法然上人は求めに求めた願いが、ただ一冊の本を多くの經典のなかから選びとり、それは善導大師が自ら体得した境地が語られているのに心うたれ、時代と場所を超えて、真実の出会いができたのである。まさに、さまざまな縁（えん）は大切にしなければならぬと思う。

四 善導大師の述懐

その善導大師は、それではどのような体験をされたのであろうか。

敬って一切有縁の知識等にもうす。余はすでにこれ生死の凡夫、智慧浅短なり。

「敬って、すべての関係のあるすぐれた方々に申しあげる。私はすでに生死の苦しみに迷う愚かな凡夫で、その智慧も浅はかで、思慮に欠けている」とこう善導大師は述懐しておられる。法然上人は恐らく、この述懐に引かれたのではあるまいか。人間の生地をさらけ出している善導大師の姿は、法然上人の気持をそのままに語ってくれているように思われたのではあるまいか。善導大師の著わした『観經の疏（かんぎょうのしよ）』はきわめて論理的で思弁的な書物である。ところが、その最後に善導大師自身の述懐と体験が急に筆致をかえて記されていたのである。このような書物はそう多いはずがない。ユニークな告白である。その善導大師の告白を法然上人は『選択集』最後の章に同じように全文を引用したのである。引用して『選択集』を終結にするのである。このことは、この述懐に十分に耳を傾ける必要があることを知らず知らずに

語っているように思われる。法然上人は最後の章にふさ
わしい文章として引用したのである。善導大師は浄土の
すばらしい様相を眼前に見せてほしいと願ひ、経を読
み、阿弥陀仏を三万遍も念ずるのである。すると夢の中
にさまざまな浄土の様子や阿弥陀仏の姿をはっきりと見
ることができた、その嬉しさを逐一語りかける。この功
徳を人びとにふりむけて、ことごとく仏道を歩もうとい
う心をおこして、真実の正しい道理を教える者となっ
て、同じく浄土に帰して、ともに仏道を成しとげよう
と、決意を述べている。

五 信ずること

自分はいらない凡夫であるが、その凡夫を救ってく
ださる阿弥陀仏を信じ、仏道とともに歩もうという善導
大師の述懐は、罪惡深重の凡夫と受けとっている法然上
人の境地とびつたり一致した。「善導はこれ阿弥陀の化
身である」といわれたのも、善導大師を信ずればこそで
あった。三祖良忠上人は我等は法然上人を信じ奉り、法
然上人は善導を信じ奉り、善導は弥陀釈迦を信じ奉りた
もうなり」と述べているのも、凡夫にできることは信ず

ることだけであると教えているようにも思われる。不信
の時代に人を信頼することは大切な行為であろう。ひと
を信ずることができる人は、仏をも信ずることができ
はずである。「信」を大切にしてこそ、迷ひ悩める人間
の進むべき道がある。自己が未完成であるから未完成な
者たち同志がたがい励ましあつていつて、完成へと近
づいていくはずである。その究極は仏にまかせておけば
よい。人間同士の信頼を恢復して、ただ一筋に（偏依）
歩むこともできることになろう。

「浄土の教えは、末世という時期に人間の素質や能力
に応じて、それを実践するめぐりあわせに当たっている。
また念仏を行すれば、ちょうど水が映し出している
月に応ずるように、と見える。凡夫に仏はただちに應え
てくださる」のだと力強く語ると同時に、法然上人は、
善導大師と同じように、自身の愚かさを反省し、謙虚な
態度をもつものこそ念仏の実践者であることを、さりげ
なく教示している。真実の念仏者は不遜であつてはな
らない。いつでもいういしくなければならぬ。この
ように反省し、懺悔してこそ、念仏は永久に伝持される
のだとさえ暗示しておられる。いかにも『選択集』の幕
切れらしい結びではないだろうか。

惠谷隆戒編

『法然上人の伝記と思想』

このほど浄土宗開宗八百年を記念して、惠谷隆戒博士を中心とする仏教大学の諸先生方が『法然上人の伝記と思想』という一書を公刊された。開宗八百年正当の本年もすでに半ばを過ぎたが、各方面よりもたらされるこうした記念慶讃の成果はまことに喜ばしいものである。とりわけ本書は、仏教大学の諸先生方が一九〇一年頃の研究振りをわかりやすく平明に記され、法然上人の伝記・著作・思想に関して広い視野からまとめられたものである。今ここでは、その内容の一々を紹介する余裕がないので、目次より本書の全容をうかがう程度にしたい。

浄土開宗の文化史的意義

第一部 伝記編

誕生から出家まで

求道と開宗

惠谷隆戒

成田俊治

伊藤唯真

石井俊瑞著

『仏徒・インドに憶う』

本書は、昨年の十二月のインド日本寺落慶法要に参加された著者が、その折の仏跡参拝の感激を契機として一書をまとめられたものである。旅立ちの前に著者は、「釈尊ご説法の場所の風致環境等にじかに接して会得を深めたい」、「なぜ仏教がインドに発祥しながら衰微の域にあるのか」、「日本寺建立によって日本仏教徒はどういう事を心掛けねばならぬのか」という三つの問題を目標とされた。このことが本書では、「インドの現況梗概」・「主なる仏跡」・「仏教衰微の因を探る」・「日本仏教徒の心構え」という四つの章題に表現整理されることになる。

著者石井俊瑞師は、先年淑徳短期大学長という要職を最後に教育界から退かれたが、その人となりはすでに宗門においては著名である。もとより本書は、帰国後、淑徳短大で行なわれた講演をもとにして編まれた小冊子ではあるが、著者の深い学殖が随所に織り込まれていて、啓発されるところも多々ある。ことに問題提起の鋭さ

『選集』選述より入滅まで

滅後の法難

法然上人の門下

第二部 著作編

『選集』のこころ

『一紙小消息』のこころ

『一枚起請文』のこころ

第三部 思想編

法爾の道理

烏帽子もきざる男

真理のかがやき

念仏と生活

念仏のこころ

法の糸より

大いなるはげみ

現代と法然上人の教え

このように本書には、法然上人の人となりやその教えについて余すところなく示されている。「すべての人びとを煩惱具足の凡夫とし、人間自覚の思想に立脚した人間の宗教」として出発した浄土宗の立教開宗の意義が手際よく解釈され、また法然思想を理解するための恰好の手引書にもなっている。広く読者諸兄のご一読をすすめたい次第である。

B 四判四四三頁 価一三〇〇円

発行所

千一〇一 千代田区神田和泉町一九

隆文館

平 祐史

西田円我

三枝樹隆善

藤堂恭俊

坪井俊映

高橋弘次

香川孝雄

水谷幸正

佐藤心岳

池見澄隆

愛宕顯昌

深見慈孝

明山安雄

清水 澄

と広い視野に立った叙述には、八十歳を越える老師とは思えぬ若々しい著者像を想起させる。

しかし本書に含められた一つの大きな価値は、「なぜ仏教がインドに発祥しながら（現に）衰微の域にあるのか」ということへの著者の感慨にある。まさに私達現代の仏教者にとって、この問いの意味するものは大きい。著者は紙幅に制限されながら、精一杯の解答を試みられたが、やはり一つの問題意識を喚起されたに止まったといえよう。しかし最近では、東西の学者のたゆまぬ努力によって、インドの民族と歴史と思想の解明は着実に進められている。恐らく広い文化史観に立った公平にして確実な見解がもたらされることも、そう遠い将来ではあるまい。今、老師の指摘を受けて奮起を要請されるものは、ほかならぬ多くの若き仏教者達であらう。

「仏徒・インドを憶う」とは著者にとっては、まことに当を得た表題であつたらう。仏教の故郷としてのインドにはるかに思いを寄せ、そのインドのはらむ苦悩をみずからに荷して考察された著者なのである。読者の視点の置き方によつては、多くの示唆が与えられるものと思う。

B 六判七八頁

発行者

東京都文京区小石川三一七―四

千一二二 真珠院



仏説無量寿經 卷上(第六回)

村瀬 秀雄

一 無量の寿命

無量寿仏寿命長久不_レ可_二称計_一。汝寧知乎。仮使十方世界無量衆生皆得二人身_一、悉令_レ成_二就声聞緣覺_一、都共集会禪思一心、竭_二智其力_一、於二百千万劫_一悉共推算計_二其寿命長遠之數_一、不_レ能_三窮尽知_二其限極_一。声聞菩薩天人之衆寿命長短亦復如_レ是。非三算數譬喻所_二能知_一。

也。又声聞菩薩其數難_レ量不_レ可_二称

說_一。神智洞達威力自在、能於_二掌中_一

一切世界_一。

無量寿仏の寿命は長久にして称計すべからず。汝はむしろ知らんや。たとひ十方世界の無量の衆生をしてみな人身を得しめ、ことごとく声聞緣覺を成就せしめ、すべて共に集会して禪思一心にその智力をつくし、百千万劫においてことごとく共に推算し、その寿命の長遠の数を計るとも、尽ぐしてその限極を知ること能わじ。声聞菩薩天人の衆の寿命の長短もまたまたかくのごとし。算數譬喻のよく知るところにあらず。また声聞菩薩はその数をはかりがたく称說すべからず。神智

洞達にして威力自在なり。よく掌中において一切の世界を持せり。

(意訳)

無量寿仏の寿命は悠久であり永遠であつて、その数を数えあげることはとうていできない。阿難よ、どうしたならば仏の寿命が無量であることを知り得るであらうか。たとい全世界のあらゆる生類が、すべて受け難い人身を受けたとして、この無数の人々がことごとく修行を積んで声聞や縁覚という聖者になつたとし、更にこの聖者たちがすべて一カ所に集會し、妄念を静め一心不乱に智慧の限りをつくし、百千万劫という実に長い間にわたつて力を合せて計算し続け、仏の寿命の長さははかつたとしても、結局のところ寿命の長さについて限界があることを知ることができない。また極樂浄土にいる声聞、菩薩、天人たちの寿命の長さも同じく仏の寿命のように永遠の寿命を保っている。これまた同様に計算や譬喩によつては、とうてい知ることができない。しかも極樂浄土には無数の声聞や菩薩がいて、その数がいかに多いかについて説きあかすことができない。これらの聖者たちは神通力をもち智慧に通達し、十分な力を發揮しているので、世界中の一切のことは掌をみるように明瞭によく知つてゐる。

二七 宝 樹

其国土七宝諸樹周二滿世界一。金樹銀

樹瑠璃樹玻璃樹珊瑚樹碼碯樹碑磲樹。

或有三寶三寶乃至七寶轉共合成一。

その国土の七宝の諸樹は世界に周滿せり。金樹、銀樹、瑠璃樹、玻璃樹、珊瑚樹、碼碯樹、碑磲樹あり。あるいは二宝三寶ないし七宝のうたと共に合成せるあり。

(意訳)

極樂浄土には七宝の樹々があつて、くまなく一面に。これらの樹々の中には金の樹、銀の樹、瑠璃の樹、玻璃の樹、珊瑚の樹、碼碯の樹、碑磲の樹のように一宝だけの樹がある。あるいはまた二宝からできている樹があり、三寶から七宝にいたるまで入り混つてできている樹がある。

三 道 場 樹

無量寿仏其道場樹高四百里、其

本周囲五十由旬、枝葉四布二十万

里、一切衆宝自然合成。以二月光摩

尼持海輪宝衆宝之王一而莊一嚴之一。

周二市条間一垂二宝瓔珞一。百千万色

種種異変、無量光燄照一耀無レ極。珍

妙宝網羅二覆其上二、一切莊嚴随レ応

而現。微風徐動吹二諸枝葉二演二出無

量妙法音声一。其声流布徧二諸仏国一。

其聞レ音者得二深法忍一住二不退転一。

無量寿仏のその道場樹の高さは四百里なり。そのもとの周囲は五十由旬なり。枝葉の四布せることは二十万里なり。

一切の衆宝は自然に合成せり。月光摩尼、持海輪宝の衆宝の王をもってこれを莊嚴せり。こえだの間に周さうして宝瓔珞を垂れたり。百千万の色は種々に異変す。無量の光燄照耀す

るとききわまりなし。珍妙の宝網はその上に羅覆せり。一切の莊嚴はよろしきに随つて現ず。微風はゆるく動いて諸々の枝葉を吹くに無量の妙法の音声演出す。その声は流布して諸仏の国にへんず。その音を聞くものは深法忍を得て不退転に住す。

(意訳)

無量寿仏が悟りをひらかれた菩提樹の高さは千六百万年に及ぶ。その根元の周りは八千杵もある。四方にのびた枝葉の広さは八十万杵にわたつて拡がる。この樹はあらゆる自然の宝をもつてできている。宝の中には月光摩尼や持海輪宝のように宝の中の王といわれるものもあつて樹を飾っている。小枝の間をめぐつて宝の飾りが垂れさがっている。これらの宝の輝きは百千万種類の色に変化して光り輝いている。つまりこの樹は無量にかがやく光りを放っているのである。またこの樹の上は微妙な宝をちりばめた網で覆われている。しかもすべての飾りは適宜に調和がとれている。微風がゆるく吹きわたつて樹の枝や葉を動かし、風の音は絶え間なく妙なる法を説く声となつて聞かれる。この音声は次第に流れて諸仏の国土にまで行きわたっている。もしこの声を聞けば、その者は深法忍、即ち三法忍を悟ることができて、再びもとにもどることがない。三法忍の第一は音響忍といい、万物は音と同

じく実体がないと知る智慧であり、第二は柔順忍といい、すべては無生であると知る智慧であり、第三は無生法忍といい、諸法は不生不滅であると知る智慧である。

四 講堂と宝池

講堂精舎宮殿樓觀皆七宝莊嚴自然

化成。復以二真珠明月摩尼衆宝一以

為二交露一覆二蓋其上。内外左右有二

諸浴池一、或十由旬或二十三十乃至

百千由旬縱広深淺各皆一等。八功德

水湛然盈滿清淨香潔味如三甘露。黃

金池者底白銀沙白銀池者、底黃金沙。

講堂精舎宮殿樓觀があり、みな七宝の莊嚴は自然の化成なり。また真珠明月摩尼の衆宝をもって交露とし、その上に覆蓋せり。内外左右にもろもろの浴地があり、あるいは十由旬あるいは二十三十乃至百千由旬にして縱広深淺はおのおのみな一等なり。八功德水は湛然としてよう満し、清淨香潔にし

て味いは甘露のごとし。黄金の池には底に白銀の沙があり、白銀の池には底に黄金の沙がある。

(意訳)

極楽淨土に法を説く講堂、行者が居住する精舎、広大な宮殿、重層の高殿等があつて、これらの建物はみな自然の七宝でできてゐる。また真珠や明月摩尼やその他多くの寶石で飾られた帳幕があつて、建物の上を覆つてゐる。これらの建物の前後左右に水浴をする池が沢山にあつて、その大きさは二百軒、四百軒、六百軒のものから数万軒にも及ぶものまでのもがある。しかしいづれの池でも縱横と深さとは同じ大きさとなつてゐる。池の中には清淨、潤沢、不臭、輕、冷、軟、美、飲時調適飲已無患の八つの功德をもつ水が、まんまんとみちてゐる。この水は清らかであり、香りが高く、味は甘露のようである。黄金の池には、底に白銀の砂が敷かれ、白銀の池には、底に黄金の砂が敷かれてゐる。

五 宇宙に遍滿する仏

衆宝蓮華周二滿世界一。一一宝華百千

億葉。其華光明無量種色。青色青光

白色白光玄黃朱紫光色亦然。睍睍煥

爛明旺日月。一一華中出三三十六百億光一。一一光中出三三十六百千億仏一。身色紫金相好殊特。一一諸仏又放三百千光明一、普為二十方一説二微妙法一。

如レ是諸仏各各安二立無量衆生於仏正

道一。

衆宝の蓮華は世界に周満せり。一一の宝華に百千億の葉がある。その華の光明に無量種の色がある。青色には青光があり、白色には白光があり、玄黄朱紫の光色もまた然なり。いようかんらんにして明旺なること日月のごとし。一一の華の中より三三十六百千億の光りをいだす。一一の光りの中より三十六百千億の仏をいだす。身色は紫金にして相好は殊特なり。一一の諸仏はまた百千の光明を放ちて、あまねく十方のために微妙の法を説きたもう。かくのごとき諸仏はおのの無量の衆生を仏の正道に安立せしめたもう。

(意訳)

極楽浄土には多宝の蓮華があつて、くまなく一面に咲いている。一つ一つの宝蓮華に百千億にのぼる多くの花卉がついている。この蓮華からは光明が放たれ、あらゆる色に輝いて

いる。たとえば青色の蓮華からは青色の光明が放たれ、白色の蓮華からは白色の光明が放たれている。このように玄黄色、朱色、紫色等の蓮華からは同じくそれぞれの色の光明が放たれている。この光明はまことに盛んであり鮮明であつて、あだかも日や月のように輝いている。そして一つ一つの蓮華から三三十六百千億という多くの光明が放たれている。この光明の一つ一つから三三十六百千億という多くの仏が現われる。この仏たちのお身体は紫金色に輝き、そのお姿はまことに勝れたものである。この仏たちはそれぞれ百千の光明を放ち、あらゆる世界の人々のために微妙の法を説き給うている。このようにして多くの仏たちは、無数の人々を化益し、仏の正しい道にお導きになっているのである。

このように極楽浄土に咲く蓮華からは色とりどりの無数の光明が放たれ、この光明が更に無数の仏となつて宇宙に遍満している。この仏たちは無量寿仏の分身もとみられるので結局のところ極楽浄土の教主無量寿仏は、西方におられながらもその分身は宇宙に遍満しているわけである。しかもこの仏たちは全世界の人々のために現に説法し、化益し給うている。即ち無量寿仏は西方を中心として全宇宙に遍満し、無量の大衆を現に教化されているというところに、この仏の無限に大きな救いの力があるのである。(上巻おわり)



念佛ひじり三国志

(四)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

俊乗坊重源は粘り強く、精力的に口説いている。五条大納言邦綱に光明山寺の七重の塔に要する費用を出させようとするのだ。

その情熱は、明遍をあきれさせるほどのものだった。世捨て人の面影など微塵もない。脂ぎった仕事師の顔だ。取引にかけては当代一流の邦綱がたじたとになっている。

「近ごろは諸事にわたって出費がかさんでいる」

「大納言殿が大相国のふところを預っていることは、よく承知しています。しかしこれはあなたの死活の問題ですぞ」

「死活の問題とは？」

「このままでは間違いなく地獄へ墮ちる」

「なぜか」

「胸に手をあてお考えなさい。あなたは黄金の力で多くの人々をあやめ、おとし入れてきた。そうでしょう。早い話が此処にいる明遍得業」

脅迫する姿勢になった。

邦綱は嫌る表情を結んで、ちらりと明遍を見やった。

「あの平治の乱の折、信西入道をおとし入れ、獄門首にさらした黒幕は、大納言、あなただった」

「そんな非業をしたおぼえはない」

「なあに確証はちゃんと握んでいます。大相国清盛公の口からはっきりと聞きました。信西入道の遺児たちは先日、一門八講の集りを持った。南都北嶺の高僧たちです。信西入道の十三回忌供養だが、いったい何を折ったと思いますか」

「そんなこと、わかる道理がない」

「父を死に追いやった怨敵の調伏ですよ」

「怨敵とは、このわしということになるのか」

さすがに邦網の顔は青ざめてきた。

「ここにいる明遍得業は参列しなかったが、澄憲、覺憲、勝憲、静憲、光憲、憲曜たち。大納言殿、いかがですか。これらいづれ劣らぬ高僧名僧たちが、あなたに呪いをかけているのですぞ。地獄行きは間違いないでしょうが」

「もしもそんな理不尽なことが真実おこなわれたのなら、大相国にお願ひして一網打尽じゃ」

「はっはっはは……坊主どもの首を斬ったとて、あなたが救われるわけはありません」

「光明山に七重の塔を建立すれば、その罪が救われると申すのか」

「それだけでは駄目です。あなた自身も入道出家しなければならぬ。立派な授戒師を得て」

「そんな立派な授戒師がいるだらうか。近ごろ南都北嶺の戒師は名ばかりでう」

「おります」

「どのお聖人か」

「比叡山、黒谷の別所にいる法然房源空。彼こそは天下第一

前号のあらすじ

平治の乱より十二年が流れた。世は「平氏に非ざれば人に非ず」といった平家全盛の時代であった。明遍は高野の蓮華谷に遁世はしていたが、すでに三論の学匠として東大寺では已講の位にあり、東南院の明遍得業としてその名を馳せていた。また信西の遣児達もそれぞれ桑門で活躍し、ことに澄憲法師は人気僧であった。信西十三回忌のその日、澄憲らは醍醐寺で法要を営んだが、長兄の是憲いや遊蓮房円照の姿はなく、明遍も木幡峠の信西塚に詣で光明山寺へ登った。光明山寺は念仏じりの道場であったが、そこで入宋僧俊乗坊重源に会う。重源は立身栄達を嫌って、諸方の寄進を仰いで造寺造堂にひたすら励んでいた。意気投合した二人は大いに語り合ったが、その折、明遍は叡山黒谷の源空というその人の名を初めて聞く。山を降りる日、重源は明遍に「大福長者の邸へ伴をせよ」と頼む。大福長者とはすでに五条大納言となった藤原邦網のことであった。

の戒師です」

明遍はおどろいた。俊乗房はまたしても此処で源空の名を持ち出したのである。それも天下第一の戒師とは――。

この仕事師坊主、相当なハッタリ屋だな、とあきれてしまふ。光明山では法然房が戒律に精通しているなぞとは、おくびにも洩らさなかったではないか。

「法然房……聞いたことのない名だな。どの一族か」

＜比叡の源空＞



「美作国久米郡の押領使漆間なにかしの子とか。むろん卑官の出自でございます。しかし比叡山に登山以来、驚くべき刻苦精勵を果たし、大乘小乗の經典をあまねく精読し、知らざることはございません。とりわけ円頓戒、布薩戒に通曉、當代真の受戒を致そうとすれば、この聖人をおいてほかにはございませんまい」

弁舌さわやかに俊乗坊は言いつるのであった。

「無名の戒師か」

邦綱はしばらく黙りこんでいたが、面白いその法然房とやらに会ってみたい、と言った。

円頓戒にせよ、布薩戒にせよ、形式儀礼化した昨今の仏教界では高位貴賓の僧が戒師となる習わしであった。それを無名で無位の別所ひじりにゆだねるという。

邦綱自身が九条家の雑色から身をおこしているだけに、強い興趣をおぼえたに違いない。

「必ず法然房をお邸に連れてまいります。ですから光明山の七重の塔を、よろしくお願い申し上げます」

俊乗房は執拗に喰い下がってゆく。

「うむ、考えておこう」

うんざりした顔で、やっと仕事師の鋭鋒をかわした邦綱は、明遍をかえりみた。そして兄の信濃入道是憲の近況をた

すねてきた。

「あの兄は、西山の広谷でひじりになったと聞いております。ただしこの十二年の間、たえて再会しておりませぬ」

「ひじりになって遁世したか。小納言殿のお子らのなかでも最大の頭脳、徳操高い若者であったが、それは惜しいことをした。世が世なれば大臣宰相の座も占められる器量ぞ」

「……」

何を吐かず、と明遍は言いかえしてやりたかった。廟堂における自分ら一族の息の根を止めたのは、大福長者よ、お前自身ではなかったか。

邦綱邸を辞去し、五条の大路で俊乗房と別れた明遍は、一瞬どこへゆこうかと迷った。高野山へ戻るにしても一度は奈良の東南院へも顔を出しておかねばならない。真言密教の修学が蓮華谷へこもった理由だが、新春には東大寺で維摩会の講義を大衆にしてやる約束があった。その日取りなどを打合せておかねばならなかった。

しかし奈良なら一日二日を急ぐ必要はなかった。明遍は思いをまとめると、道を急ぎはじめた。

無性に兄の是憲に会いたくなったのである。西山へいってみよう。

昔、そこには都があった。ただしわずか十年間だけのことだ。

桓武帝は延暦三年（七八四）の十一月、奈良平城の京から遷都した。巨費を投じて新しい都を造営したのだ。だが同じ延暦十三年、もうこの新都は見捨てられてしまった。鷹狩りに出て、北方に葛野の盆地を見た桓武帝はそこへ再度、遷都することを決意した。現在の平安京である。

世界の首都史でも珍しい短命さであった。

桓武帝の気まぐれではない。それどころか、そんな気まぐれが許されぬ窮迫ぶりだった。東北地方の蝦夷征伐で、出費はおびただしいのだ。

「たたりじゃよ。たたりを恐れて逃げ出したのだ」

と、兄の是憲——遊蓮房円照は説明してくれた。

いま明遍は、幻の都長岡京の跡を眼下におさめる西山の頂に立っていた。善峰という名がある頂きだそうである。

昨日の夕暮、明遍は西山の広谷へやってきた。その山合い谷合いには、慧心流の念仏ひじりたちが銘々勝手に庵（いおり）を結んでいた。

念仏ひじり。

現代流に言えば、体制からはみ出した、正統なコースを皇族貴族の子弟にはばまれて、空しく隠者となってしまった僧たちである。

この私僧たちは、体制への叛逆を、空也上人、源信僧都以来の念仏に求めた。もちろんそれは後に出現する専修念仏ではない。

兄の遊蓮房は久々の再会を心から悦んでくれた。広谷の庵で一夜を明かした明遍は、兄の案内でさつき善峰へ登ってきたのである。

漠々たる沃野がのぞめる。遠く宇治川、桂川の流れが光り、田園の中心部には巨椋池（おぐらいけ）が横たわっている。

三百年の歳月が過ぎたとは言え、不思議に長岡京は痕跡らしきものを全くとどめていなかった。諸殿、諸門はどこへ消えたのであろうか。

「たたりじゃよ。たたりを消すために懸命じゃった。新都を造営した数倍の財貨を投じて破壊しつくし、痕跡を地下深く埋めこんでしまったのだ」

「ずいぶん無駄なことを」

「いやいや、それほどたたりは恐ろしかった。史書によると、長岡京へ遷都した十年間、凶事ばかりが続いたのじゃ」

兄の遊蓮房は昔に変わらぬ博識ぶりを披露してくれる。

凶事の発端は、長岡京の造営長官だった藤原種継が暗殺されたことだ。桓武帝の寵臣で、その娘旅子は帝最愛の妃でもあった。

下手人は左少弁の同伴継人。糸をたぐってみたら大伴族の氏長者家持が首謀者だった。ただしこの万葉の歌人は事件の二十五日前に病死していた。死後ながら位階は剝奪され、所有地は没収された。

陰謀の暗雲は大伴一族の頭上だけではおさまらなかった。雲脚のゆくてに重大な人物の像が浮かびあがった。桓武帝の皇太子である早良親王だ。

帝はこの実弟を捕らえ、拷問した。酸鼻をきわめた拷問だった。皇太子は頑強に否定しつづけた。断食でむくいた。幽閉十六日目、淡路島へ流罪とさまった。だが虜舟が淀川を下ってゆく途次、早良親王は死んだ。

「帝は鬼だ、鬼だ」

呪いの言葉を絶叫しながら息絶えたという。

凶事はこれだけにとどまらない。延暦七年の五月、愛妃旅子が病魔に奪われた。続いて母の高野皇太后、正妻の皇后藤原乙牟漏まであい前後して薨じた。蝦夷征伐の官軍は大敗して帰ってくる。疫病は諸国にひろがり、皇太子となった実子の安殿も病床に臥した。伊勢神宮が盗賊の手で焼き払われ

た。

ついに桓武帝は決断した。

新都長岡京そのものがたたっている。瓦一枚も残さずに埋めてしまえ！

「のう明遍。この国の考え方は、何かと言えば怨霊だ、たたりじゃだ。悪いのはあの大地ではないぞ」

遊蓮房はのどかな田園を指さして言った。

「そこに住んだ人間たちでしょう」

「その通りだ。桓武帝が皇太子を殺したのも所詮は権力の闘争だ。後になって崇道天皇なぞと追贈してもその罪はつぐなわれぬ」

「崇道天皇ですか。保元の乱の新院も……」

「そうじゃよ。崇徳院の追贈じゃ。崇りを恐れてのことだ。

崇はたたりじゃからな。その昔、蘇我馬子に斬られたのが崇駿天皇、こんな浅墓な考えはどこから発したと思うか、明遍」

「さあ……」

「仏法じゃ。この国へ渡ってきた仏法が、真意をゆがめて、神道と妥協して、たたりの思想で権力に媚びたのじゃ」

「仏法はゆがめられたのですか」

「父上のお最後を記憶しているであろうが」

「はい、つい昨日のことの如く」

「当代無双の博覧知識とうたわれた父上じゃ。仏法への造詣でも衆にぬきんでていた。あの父上にしてからが、お最後の日は惑乱の極、恐れおののいて自ら穴を掘り、そこに身を沈めていたではないか。たたりの前に身も心もなかった。悲しいことだ」

「……」

明遍はじつと兄の横顔を見すえた。

いま兄の遊蓮房は何を考えているのであろうか。あれから十二年、この谷合いの庵居にこもって、どんな仏法を掴んだというのであろうか。

「正しい仏法とは限らない仏の慈悲にすがって救われることなのじゃ」

「慈悲——」

「仏はたたり、人間を呪ったりする存在ではない。苦しむ人間を救って下さる大悲大慈のお方じゃ」

「その仏とは」

「阿弥陀仏だ」

「經典のどこに書いてありますか」

「無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経じゃ。ひとえにこの阿弥陀仏の御名を唱えて、お慈悲にすがり申せとな」

そこで遊蓮房はこの西山広谷へきて、念仏回心を得た経緯を語ってくれた。

善峰寺の経蔵におさめられた一切経をくまなくひもといたという。当初は法華経にひかれ、そらんずるまでになった。だが法華経がえがく世界は知性の上で了解はできても一向に心の糧となっていないことを知った。

やがて遊蓮房は、唐の善導大師が註した観無量寿経疏に触れた。そこでは救済の仏法として称名念仏を強く主張していた。

一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざる者、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずがゆえに。

遊蓮房はこの瞬間から法華経をはじめ、一切の經典を忘却し去ったという。

「もはや何の必要もない。いや、なまじひもとけば雑念しかおこつてこない。捨てるのじゃ。称名念仏の一行あるのみ」

遊蓮房はそこで、くるりと背後をふりむいた。眼下の沃野に背を向けた。西の空に向つて念仏をとなえはじめた。

広谷へ下る山路を踏みながら明遍は、新しい話題を持ち出してみた。

「兄上は法然房源空という聖人をご存知ですか」

「知らん」

「黒谷の別所にて、八万四千の法巻をことごとくそらんずるほどの大智者だそうです」

「大智者じゃと……それは喰わせものだぞ。比叡山には知識の頭でっかちばかりしかおらんはずだ」

「そうだとわたしも思うんですが、この数日、しきりに法然房の噂ばかりを耳にします」

しきりと言つてもそれは俊乗房重源が言いまくっているだけだ。

「法然な。その坊主の仏法がほんものかどうか、一度試問してみろかな」

「兄上なら間違いなく真贋を見ぬくことでしょう」

「叡山の黒谷と言えば、わしらの同胞（はらから）葉室顯時の孫が出家しているはずじゃ。それにもともとあの別所は葉室家が大檀那なのだ」

「そう聞いております」

「よろしい。一度その小坊主を訪ねて、法然房とやらの大坊主に会つてきてやろう」

「その結果を兄上、是非わたしにも聞かせて下さい」

ゆくてに広谷の全貌がひろがる。正午少し前だというのに、その谷合いには乳色の霧が流れていた。いかにも陰湿な

環境だった。

「兄上、あの庵はお身体によろしくないのでは」

「なぜ」

「湿っ気が強すぎます。一夜ご厄介になったのですが、咽喉がおかされてしまいました」

「明遍、何を言うか。わしにとっては絶対の悟りを与えられた聖地だぞ。身体などどうなつたとて、かまわぬのだ」

「お瘦せになりました兄上。もともと頑健ではない兄上ではございませぬか」

「人間は正しい往生を得るためにのみ生きるのだ、明遍」

遊蓮房は笑い飛ばしたつもりなのだろうが、その声音は妙に冴えなかった。そしてすぐに軽く咳こんだ。

三

遊蓮房円照は久方ぶりで京都の街へ下つた。長い冬が去つて、春のなごみが路上にあった。弟が言い残していった黒谷の法然房に会つてみたくなつたのである。

八万四千の法巻をすべてそらんずるという大知識――

知識はあつても果たして仏法の真髓を掴んでいる坊主であるかどうか。遊蓮房はこの眼で、しかと確認しておきたかつた。

いや、いずれは小理屈をならべたてる天台坊主であらう。

黒谷へ登る前に遊蓮房は油小路の葉室邸へいった。異母兄だった中山中納言顯時の邸だが、顯時はすでに先年他界し、長男の行隆がいるはずであった。この行隆の子が出家して黒谷で法然房の法弟となっている。まず行隆に黒谷の様子を聞いておきたいと思つた。

築土は崩れ、邸内の雑草がおい繁っている。どこに建物があるにしているのかもわからぬ廃墟であつた。

ようやく古材の浮んだ池の彼方に掘立て小屋を発見した。中納言在世当時の契美な邸宅の片鱗もとどめてはいなかつた。

小屋の前に立つて声をかけると、奥で人影が動いた。烏帽子もつけぬ薄い頭髪の男が這い出るように姿を現した。

「どちらのお上人で」

「見忘れたか、行隆殿。信濃守じゃ」

「信濃守……おお、これは富小路の是憲殿」

「そんな名を呼んで下さるな。いまは私僧の遊蓮房円照じゃ。行隆殿にもお変りはなく」

お変りがないどころか、ご覧のとおりだ。尾羽打ち枯らしたこのていらくじや」

愚痴っぽい男である。父顯時が在世のころはその威光で、

《草庵の隆行》



とんとん拍子に昇官したものだ。ことに「弁」になったときは一気に右少弁長方を飛び越えて左少弁へ累進した。あのころは颯爽と凛々しい若公卿であった。

二条帝のそば近く仕えていたが、帝の崩御で政治的基盤を失った。父にも死なれ、仁安四年から官を離れ、浪々の身であるという。すでに五年も無位無官。

「官を離れておると荘園も軽んじて、いっこうに年貢を届けてくれぬ。哀れな話でござるよ」

「じつはな、行隆殿。今日参ったのはほかでもない。おぬしのご子息な。叡山の黒谷にいと聞いた」

「ああ、叙空上人のもとにいる。信空と申す」

「これから訪ねたいと思うのだが、同道してはくれまいか」

「黒谷までへか」

「さよう」

「お安い御用だが……」

「何かさしつかえがあるのか」

「じつは朝から未だ何も食しておらぬ。空腹で山道が登れるかどうか」

「それは難儀なこと。出家の身だが、食扶持ぐらいなら持ち合せておる」

「おお豪儀。この先に餅屋がござる。あそこでふるまって頂

ければ」

「お安い御用だ」

行隆は俄かに生氣を取り戻した。小屋の内へ駆けこむと、大声で叫び出した。

「餅を食わせるぞ。みんな、餅を食わせるぞ」

再び現れたとき、行隆の背後には妻子四人がぞろぞろ従っていた。遊蓮房は苦笑しないわけにはいかなかった。

話はあとのことになるが、この葉室行隆、さらに十年間も浪々の身を送らされるのである。ところが五十一才になった治承三年、突如として五位の藏人に復官する。

まさしく突如として、である。

折しも鹿ヶ谷陰謀発覚の直後だった。権力者平清盛から呼び出された行隆は、陰謀に加担したこと疑われたと錯覚し、逃げまわるのである。ようやく出頭したら復官。そればかりか仕度の品として清盛から米百石、絹百匹を送られて、転ろげまわって悦ぶ。

そのあと、とんとんと左大弁まで昇進した行隆は、例の平重衡によって焼かれた東大寺の復興長官となり、軽率な動きを閑白兼突に嗤われ、たしなめられながらも大活躍をするのである。

皮肉にも行隆が復官できて欣喜勇躍するころ、遊蓮房円照

は三十九歳の短い生涯を閉じている。

とにかくいま、承安二年歳晩の葉室行隆はにっちもさっちもゆかぬ窮状だった。遊蓮房のおこりで、安い餅を妻子ともどもがつつ喰って、ようやく人心地がついた。

「お前らは邸へ戻れ。わしは是憲殿を黒谷まで案内する」

先に立って元気な足取りで歩きだした。

黒谷——正確には比叡山の西塔大黒谷である。

根本中堂のある頂きの裾をめぐる、常緑樹の葉波も深い谷道へはいる。その奥に房舎や経蔵がちらなる別所が見えてくる。

かつて保元の乱時、敗亡の源為義はこの黒谷へ逃げこんだ。二十五三昧堂にこもって出家した。法名も義法房と名づけられた。堅者（りっしや）は月輪房という念仏ひじりであった。

月輪房が誰であるかは判らない。当時法然房源空は二十四歳だった。嵯峨清涼寺に参籠したり、南都に学匠を求めて出かけていったところである。

為義があのまま黒谷にひそんでいたら、六十三歳のこの老人の運命は別途をひらいていたかも知れぬ。

わが子義朝が大勲功を立てたゆえ、その力で助命がかなうはずである。こんな都からの飛語を頼って、のこのこ娑婆へ

出ていってしまった。あたし出家義法房を源為義へ戻したために首を斬られたのである。

この為義と丁度入れ違いに、翌保元二年、行隆の子法蓮房信空は黒谷へ出家した身を投じてきた。

いま遊蓮房はこの若き僧信空と対座している。師の叡空上人は南谷の方へいって留守だった。

行隆をまじえて、京都の近況なぞを語り合っていたが、遊蓮房の眼は信空の肩越しに奥の間を注視していた。そこには此方へ背を向け、一心に聖經を被見する念仏じりの姿があった。

ついさっき、簡単な挨拶だけはかわした法然房源空である。

どんな僧であるか。

遊蓮房はまず距離をおいて、観察しておきたかった。

かなりの偉軀である。肩の張りも逞しかった。自分のような蒲柳の寛ではなさそうだ。弱々しい学究ではない。

鋭い遊蓮房の視線と、それをはじかえすような部厚い肩中の肉。

ついに遊蓮房は立ち上がった。つかつかと奥の間へ移動した。法然房のかたわらへ坐った。

「おぬしは叡山きっての大知識と聞いてまいったが」

「……」

無言で視線をかえしてきた。

しかしけわしいものは全くなかった。柔和で、慈光を放つ眸だった。

「いったい仏法とは何でござろうか」
ゆっくりと口もとが動いた。

「信心することだけが仏法でございましょう」

声は明るく澄んでいた。そして、ものやさしくおだやかである。問答するとげとげしさが無い。

「ただ信心をするために、そんなに多くの知識が必要なのでござろうか」

「要りませぬ」

「では貴僧は、なぜこれほど熱心に聖經を被見なさるのか」

「わたしの顔と、あなたの顔が違っているからでしょう」

「というところ——」

「わたしは常住に聖經をひもといっていなければ、信心一本に絞ることができません」

「その信心とは、いったい何を、誰を信心するのか」

「ただ一心に阿弥陀仏です」

「阿弥陀仏？」

遊蓮房は思わず訊きかえしていた。

(つつく)

浄土宗の宝物

当麻曼茶羅

奈良 当麻寺蔵



古曼茶羅（天平時代）

最近浄土開宗八百年を記念して、宗務庁より紹介の当麻曼茶羅を写真複製したものが、定価何某かで全国に配られ、好評を得ているようである。東京寺院にも、方々で床間等に飾られているのをよく見かけるのである。私の自坊でも玄関入口に飾り、毎日眺め拝さない日はない。ところが、玄関先のせいいか、お檀家の人に「これは何んですか、立派な物ですね」と尋ねられ、概略は説明できても、こ

まごました図の説明までとなるとわかり易く説明することは難かしいのである。

ここに紹介する当麻曼茶羅は、奈良県北葛城郡当麻町にある当麻寺に所蔵されているもので、日本三曼茶羅（智光、清海、当麻）の一つとして有名である。これは観無量寿経の説相を織り表わしたもので、観経曼茶羅と

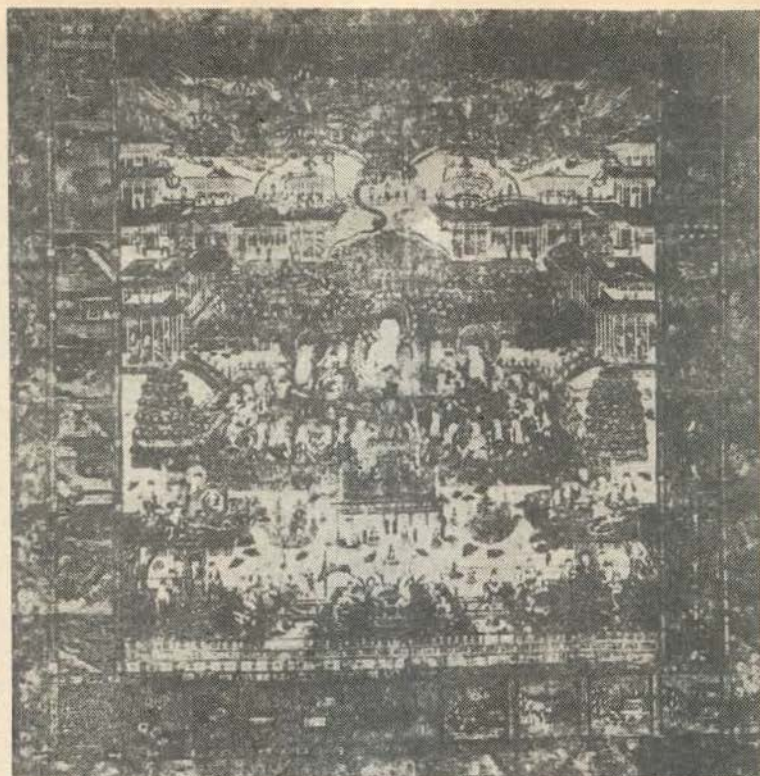
も藕糸曼茶羅とも称せられる。この大きさは一丈三尺余のものである。当麻寺には天平時代の古曼茶羅（国宝）と文亀（一五〇一〜一五〇四）年間に慶舜、專舜の模写したもの（重要文化財）、江戸時代の貞享本と延宝本とを所蔵しており、現本堂には文亀曼茶羅が安置されている。

造立の由来については、種々の伝説があり一般には中将姫（法如）が蓮糸でもつて浄土曼茶羅を織り表わしたものと伝えられる。

図相についていうと、観無量寿経に説かれた印度宮廷の秘話を基に、図の周辺三方のうち、左方には観経序分の説によつて十一段に描写したもの、右方には定善十三観を十三図に配当したもの、下方には九品往生の姿を図示したものである。このように図の一つひとつが連続した物語となつて展開され、さらにその中央には、その時感得した極楽浄土の様相が現わされている。現存の古曼茶羅は奈良朝期のもので、剝落、補筆多く、その一例として下方中央に天平宝字七年（七六三）に完成とあるが、この銘文は後世の作であるといわれている。

（後藤尚孝）

文亀曼荼羅



觀經序分の説

化前縁 欣淨縁 厭苦縁 禁母縁 禁父縁		寶持宮殿會 樹下會 父子相會		虛	空	會	寶持宮殿會 樹下會 父子相會	觀觀觀樹池樓座想身音至觀想 日水地寶寶寶華像真觀勢普無	
下下	下中	下上	中下	中中	銘文	中上	上下	上中	上上

九品往生の姿圖

定善十三觀

当麻曼荼羅圖表

伺 御 中 暑

東京都豊島区西巢鴨三二〇一

大正大学

電話(〇三)九一八七三二一代表

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

仏教大学

電話(〇七五)四九一一二四一代表

大正大学理事長

栗本俊道

京都家政短期大学

家政学科生活科学課程
栄養専修課程

服飾意匠学科服飾専攻
美術デザイン専攻

児童教育学科幼児教育専攻
初等教育専攻

東山学園長

藤原弘道

淑徳短期大学

学長 増田六郎

東京都板橋区前野町五三—七

鎮西学園

理事長 上田貞雄

学校長 上田祐規

大正大学梵文学研究室

真野竜海

晴雲寺

塚田弘導

平塚市立野町六

貞林寺住職
書道共励会主宰

林錦洞

東京都港区三田四—四—十七

白幡憲佑

横浜市南区庚台

久保山光明寺

善福寺

竹田英宣

天理市和爾町

伺	御	中	暑
神奈川県仏教会副会長 柴田 敏夫 横浜市港北区菊名町 蓮勝寺	清岸寺 原口 徳正	教安寺 野呂 幸進 川崎市川崎区小川町六一二	西光庵 東京都新宿区東大久保一ノ四〇二
中島 真哉 梅窓院 東京都港区南青山二―二六―三八	北川 一有 長寿院 東京都台東区鳥越二―十三―十八	室蘭市大沢町二―一―十 満岡寺 兼務 飯島英徳 善行寺 TEL(〇一四三)四四―二六九五	調布市柴崎一―三十八 光照寺 住職 正本実閑

「浄土」購読規定	一部 定価 百三十円 (送料十二円)	会費一カ年金一、五〇〇円 (送料不要)	浄土 八月号	昭和十年五月二日 第三種郵便物認可	昭和四十九年七月二十五日 印刷 昭和四十九年八月一日 発行	定価 百三十円 編集人 宮林 昭彦 発行人 佐藤 密雄 印刷人 関 二三男 印刷所 三幸社印刷所	東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六 発行所 法然上人鑽仰会 電話東京二六二局五九四四番 〒一〇二 振替東京八二一八七番
-----------------	-------------------------------	--------------------------------	---------------	------------------------------	--	---	---

伺

浄土門主

岸 信 宏

京都市東山 知恩院

大本山光明寺

法主 石井真峯

執事長 吉川哲雄

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

御

浄土宗宗務庁

大本山善光寺大本願

法主 一条智光

目黒 祐天寺

住職 巖谷勝雄

中

浄土宗宗務支所

法然上人御誕生の聖地

美作の国 誕生寺

岡山県久米郡久米南町誕生寺

浄土宗第二地区

東北教化センター

委員長 小川金英

暑

大本山増上寺法主

大野 法道

東京都文京区小石川三一四一六

伝通院

戸川 靈俊

京都市左京区黒谷町 西住院